

日本再浮上の構想

第8章 地球環境・資源問題

担当 庄子穩行 大内伸哉

1. 食料問題

地球規模で見ると、長期的には、人口は人口爆発といわれるほど膨大な規模に達し、経済成長と相まって、さまざまな深刻な問題（食料需要やエネルギー需要の急激な増大、経済発展が生み出す地域間の格差など）を発生させる可能性がある。

食料不足の懸念は食料価格を急騰させ、市場を混乱させる。また、資源の確保と分配の問題をめぐって国際的な緊張が高まり、あるいは紛争が発生する可能性もある。さらに、地球環境の破壊が進展し、これが人類の生存そのものを脅かすおそれがある。これらが、21世紀には現実の問題となろう。

途上国で加速する人口爆発

世界の人口は急速に増大することが見込まれている。とりわけ途上国の人口増加は急激である。先進国の人口の比重が今後長期的に減退していくのに対し、途上国の人口の比重は高まっていく。

食料供給は大丈夫か

急激な人口増大は、食料問題を深刻化させる。人口増加に対して食料供給は足りるのかどうか、これからの世界重大な関心事であり、また、大きな制約条件になる。

<世界銀行の予測>

人口が増え、穀物の消費も増えるが、先進国、途上国もそれぞれ生産が増大し、途上国の不足分は先進国の超過分でほぼ埋め合わされる。

食料増産の低下傾向

近年の食料増産傾向の鈍化、いいかえれば食料供給力の低減は明白になってきている。

理由1．農耕地の制約

理由2．化学肥料の低減

理由3．土地の劣化と大気汚染が、穀物生産にマイナスの影響を及ぼしはじめたこと

理由4．漁獲量が限界に達して、明らかに低減をはじめたこと

理由5．家畜生産の低減

中国の問題

とりわけ中国の食料問題は深刻だ。中国は一人っ子政策などで人口抑制につとめているが、いかにせん分母が大きく、人口増加数が膨大である。また、食料増産にも熱心に励み、大変な成果をあげてきたが、中国の目覚ましい経済発展が、2つの側面から、食料問題をさらに深刻化させることになった。第1は、食物連鎖である。第2に、工業化が耕地を減らし、穀物生産を減らすことである。

危機回避の方策は

危機を回避もしくは緩和するにはどうすればよいのか。

第1に、基本的な問題として、人口増加を抑制する、あるいは適切に管理をすることである。

第2に、食料備蓄。これは、食物の価格の急激な変動を緩和する装置として重要である。

第3に、食料の増産だが、そのためには耕地の維持・保全、灌漑用水の保全、地下水や水の供給システムの維持・保全が必要となる。

第4に、食物連鎖の修正・改革をする必要がある。

第5に、土壌の保全、つまり汚染、劣化の回避、あるいは水資源開発と保全、海洋資源の保全、植林などの問題について、それぞれのコミュニティー、地域、国、国際的な強い協力が望まれる。

2. エネルギー問題

石油、中東に偏りすぎた日本のエネルギー

エネルギーの需要は、経済成長にほぼ比例して増えていく。

人口×経済発展 = エネルギーの需要

エネルギー戦略 - 4つの方策

第1は、エネルギー供給を多様化する必要がある。

第2は、エネルギー消費効率を向上していく努力が必要である。

第3に、原子力発電の技術と管理能力を高める必要がある。

第4に、新エネルギー源の開発である。

3. 地球温暖化問題と酸性雨問題

現実問題となった地球温暖化

温室効果ガスからの反射熱により、太陽光からの熱よりもはるかに気温上昇が進む。つまり、温暖化が進む。これが気候の変動に影響する。

京都会議の課題

各国ができる限りの努力をするという合意の下で、どれだけの実質的な前進がはかれるかが、鍵となろう。

日本は、京都会議の議長国となるなど、世界の環境のメイン・プレイヤーであり、環境対策、技術の開発や、国際協力において、主導的な役割を果たすと同時に、国内的にもさらにいっそうの前進を図る必要がある。

酸性雨問題、砂漠化、人口集中

4. 問われる日本の役割

人口、食料、エネルギーそして環境問題が相乗作用し、経済の成長や人々の生活の安定繁栄に対して重大な制約となるおそれがある。しかも、環境破壊が進展し、人類の生活基盤そのものが破壊される。こういう問題は、21世紀に入ると、これまでとは違って目前の本格的な問題になる可能性が大きい。そういうなかで、日本の役割が問われている。日本がこれまでの経験と教訓の中から学び取り、開発してきた知識・技術をどのように世界諸国との協力関係のなかで普及していくのかが問われよう。そのことは地球環境全体の劣化を防ぐために大きな影響を持つだろうそのような国際協力をどのような形で、どれほど効果的に展開できるかが大きな課題だ。その課題は、南北問題の難しさに関わっている。

日本は世界の環境、そして日本の繁栄のための空間を確保するためにも、壁を乗り越えなければならない。壁を乗り越えるもっとも重要なハードルは、環境問題の重要性についての共通認識を、関係諸国との間でどのように醸成するかということである。

